

せんだいメディアテーク 考えるテーブル
小さなゆうわ座―声をきく みる はなす―
曽根つき子さんのキツネの話

日時 2024年2月23日（金・祝）14:00～16:00

場所 せんだいメディアテーク 7FスタジオA

目 次

- ◆ 〈民話 声の図書室〉〈小さなゆうわ座〉について 北 友花・加藤 恵子 p.2
- ◆ 升沢地区と曽根つき子さんのこと 司会進行 山田 裕子 P.4
小田嶋 利江
- ◆ 曽根つき子さんの語りを聞く 一 p.7
「キツネに仕返しされた薬屋さん」〈映像〉
「キツネのお産を助けたお医者さん」〈語り〉 語り 倉林 恵子
- ◆ みなさんと感想や意見の交換 一 p.11

《 休 憩 》

- ◆ 曽根つき子さんの語りを聞く 二 p.15
「赤いねんねこ着て赤ちゃん背負ったキツネ」〈映像〉
「赤ん坊泣き声で誘うキツネ」〈映像〉
「キツネ火に送られてきたお父さん」〈映像〉
「子連れの母ギツネに忠告する」〈映像〉
「お母さんになって子どもを抱いていたキツネ」〈語り〉 語り 倉林 恵子
- ◆ みなさんと感想や意見の交換 二 p.21

各担当者

〈当日〉	進行・解説	山田 裕子・小田嶋 利江
	語り	倉林 恵子
	板書	佐竹 真紀子
	smt スタッフ	北 友花
〈記録〉	文字起し・編集	小田嶋 利江・加藤 恵子・倉林 恵子

せんだいメディアテーク 考えるテーブル
小さなゆうわ座―声をきく みる はなす―
曾根つき子さんのキツネの話

◆〈民話 声の図書室〉〈小さなゆうわ座〉について

北 友花〈せんだいメディアテーク〉

【〈民話声の図書室〉と〈小さなゆうわ座〉】

わたしの方から簡単にメディアスタディーズを説明させていただきます。〈みやぎ民話の会 民話声の図書室プロジェクトチーム〉という名前で、二〇一二年にメディアテークを拠点に活動している市民グループになります。〈小さなゆうわ座〉と今回題して行うんですが、たぶんここにお越しの方は〈民話 ゆうわ座〉をご存知かと思います。昨年度、つまり前の前の十二月で九回まで開催していた〈民話 ゆうわ座〉がありまして、それは一階でかなりの、百五十人以上の方がいらっしゃるような、大きいイベントだったんですが、昨年度をひとくぎりとして、また七階のスタジオに戻って、「小さな」と頭に付けて、〈ゆうわ座〉を開催することとなりました。本日は、進行を山田さん、小田嶋さんをお願いするのですが、「グラフィック」と呼んでいる板書に、佐竹真紀子さんをお呼びしています。こちら楽しみながら、視覚的にも今日の対話をご覧いただけたらと思います。それではよろしくお願いします。

加藤 恵子〈みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム〉

【語り聞く場の記録と〈小さなゆうわ座〉】

みなさん、こんにちは。わたくしは、民話声の図書室プロジェクトチームの加藤恵子と申します。今日は〈小さなゆうわ座〉ということで、小野先生がいらっしゃらない〈小さなゆうわ座〉を開きたいと思います。今日はですね、二〇一五年に作りました DVD、『黒川郡大和町の曾根つき子の語り』、四冊ありまして、一つの箱に二枚ずつ入っている DVD が、ここにありますが、四冊で、この中には単純に数えると、数としては七十三話入っております。その話を活用して、曾根つき子さんのキツネ話のいろいろなお話をお聞きして、そして、つき子さんの語る姿を見て、そして聞いて、ここにお集まりのみなさまと、色々な思いを話し合っていきたいと思っております。

向こうのコーナーに、民話声の図書室でこれまで製作いたしました CD 四十五冊、DVD が三十八冊展示されております。始めにご覧になった方もいらっしゃると思いますが、また、二月二十九日まで展示をしておりますので、機会がありましたら是非手に取って見ていただければと思います。

とくに DVD はですね、伝承されてきた語りの姿を、映像の記録として残したいなという思いから、二〇一二年、震災の次の年から制作が始まりました。長い間、わたしたちみやぎ民話の会と親交を重ねてくださいました語り手の方々と、わたしたちとで、語り聞く対話の中から、話におのずと生まれてくる、本来の民話の聞く語る場をそのまま映像化したいとして、DVD に残したものです。民話の土台をなす語り手の暮らし、生立ち、土地柄などが、聞き手と対話することによって、語られてくる姿を、そのまま撮影し記録いたしました。

これまで三十八冊、十一人の語り手の映像を制作しましたが、そのうち八人の方は、もう鬼籍に入られてしまいました。この展示が始まった二月初めに、わたしは、まだ誰もいないこの前を通りましたとき、十一台の全てのパソコンがたちあがっておりまして、その画面は、在りし日にいきいきと語る語り手の方々の姿でした。わたしはその映像を見て胸がいっぱいになって、なんともなつかしく、しばらくその画面に見入っておりました。DVD 映像に残る語り手の姿や話を、今日みなさまと一緒に、こうして見ながら、考えることができる場ができたこと、と

てもありがたいことだなと思っております。

つき子さんが、このDVD映像に残しました思いをみなさまとともに、小田嶋さんのガイドによって、そしてみなさんの心の中に種を蒔いていただいて、そしてその種を育てて、次世代に語り継げたらどんなにうれしいことかなと思って、今日のこの〈小さなゆうわ座〉にのぞんでおります。これから映像を見ながら、話し合いを始めたいと思いますが、どうぞみなさまよろしく願いいたします。きょうはありがとうございます。(拍手)

進行 山田 裕子

【ふるさとを離れた曾根つき子さんの語りの世界】

今日はこういう天候の中、ここまで来るのも、バス乗り継いだり、電車乗り継いでいらした方々もおられると思うんですが、ほんとうに今日はありがとうございます。それではいまから始めたいと思いますが、今日の進行を務めます山田と申します。よろしくお願いします。

わたしも一言だけお話させていただきますが、曾根つき子さんのDVDを作ったのは、二〇一三年なんですね。さきほど加藤恵子さんも話してましたが、お話を聞いたのは二〇一三年でした。その十年ちょっと前に、じつは、米軍の演習場〔実弾射撃演習〕の沖縄からの移転のために、つき子さんのいらっしゃる升沢地区が、集団移転することになったんですね。で、その集団移転に伴って、つき子さんも吉岡の方に降りてらしたんですが、それがちょうどお話を聞く十年前でした。

つき子さんはほんとに、どこにでもいらっしゃるような、背のこのくらいの、ちいさなおばあちゃんなんですが、そのつき子さんの頭の中に、十年たって、離れざるをえなかった、自分の生まれ育った、先祖代々住んでいた土地を離れざるをえなかったつき子さんの頭の中にはどんな世界があるのかな、どんなお話が語られるのかなと思って、わたしどもも、たいへん待ちのそんでというか、心待ちにして聞かせていただいたお話です。

では、これを作るときに聞き手の中心となりました小田嶋さんの解説で、つき子さんの映像を見ながら、いろいろまたみなさんとお話合いくたたらと思っています。では始めます。

◆升沢地区と曾根つき子さんのこと

小田嶋 利江 〈みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム〉

みなさん、こんにちは。さっそくみなさん映像を見たいんじゃないかと思うんですが、ちょっとだけ最初に、つき子さんについて説明させてください。

【最奥のムラ 升沢】 いま山田さんがおっしゃったように、つきさんが生まれて、育って、晩年までくらししておられたのが、宮城県黒川郡大和町吉田升沢地区というんですね。みなさん吉岡はご存じだと思うんですけど、県外の方はわからないかな、宮城県の真ん中ごろに大和町という、ちょっと面白いチョウチョのような形をした町があって、その中心地が吉岡って言って、やっぱり真ん中ごろにあるんですね。そこから西に向かってずーっと県道を行きますと、だんだん山になります。じつは吉岡からどのくらいあるかというと、約二十キロメートル、もう山の中なんですね、船形山系の標高三五〇メートル位、もう奥羽山脈に入っていて、船形山、山形では御所山ごしょざんていいますけど、千五百メートルの山頂がすぐそこに見えるような、当時としては宮城県内でこの船形山の山筋において一番奥の集落です。

江戸時代でも現代でも、[船形山への] 登山道の入り口なんですね、登山口です。山形県の村山市への街道の道でして、江戸時代にはその峠道で「境目番所」と呼ばれるいわゆる関所ですね、仙台藩の番所があったところです。ほんとうに同じ大和町なんですけど、ここ[仙台]から吉岡に行って、吉岡からずーっとまた山に向かうんですが、吉岡が真ん中ぐらゐの感覚です。

【分水嶺を越えて】 どのくらい奥かっていうと、升沢地区の手前に風早峠かざはやとうげっていう峠があるんですね。そこすごく見晴らしのいいところで、そこからくっ而降りたところに升沢集落があるんですが、その峠は、一つの分水嶺といいますが、山の峰に雨が降って、その峰のこちら側と向こう側に水が分かれますね、こちら側に分かれた水が吉田川になって仙台湾にそそぎます。向こう側に流れた水は荒川から花川に行って、鳴瀬川になるんですが、その河口で吉田川とまた合流します。それまでは、まったく水系の違うところを流れるんですね。だから吉岡からずーっと登っていくんですが、じつは分水嶺を越えた別の水系に入ったところが升沢なんですね。今は王城寺原演習場があるので、こちら側が黒川郡、向こう側が加美郡になります。加美郡色麻への道は閉ざされてるんですが、むかしはそっちの方がメインの道だったんですね。だから文化的には、色麻とつながっているような集落です。

【山を降りる】 なんてつきさんが吉岡の麓に降りてこなくちゃいけなかったかということ、一九九六年に米軍の沖縄での実弾射撃訓練を、本土にも分散させようということで、[自衛隊の] 王城寺原演習場がその演習地になったんですね。そのときにその砲撃音などの保障として、ムラを挙げて集団移転をしたんです。だから、今はあの地区には家はなくて、そこがむかし村だったっていうのは、もうわからなくなってる、野原なんですけど、当時は村があって、一九九七年に集団移転が開始されて、一九九九年には、もうすっかりみんな取り壊して、下に降りてきます、その人たちは、三十数軒あって、六十数名残ってたんですが、それまでにもうすでに若い方は下に降りてしまってたんですね。おじいちゃん、おばあちゃんが残ってたんですが、みなさんそれぞれ、田んぼ畑を耕したり、鉄砲撃ちをやったりして、それなりに楽しく暮らしてらっしゃいました。

【聞かれないこと、語られないことの記録】 その移転に当たって、ムラを挙げて移ってしまうので、その民俗文化を調査記録しようということが大和町で企画されて、それを委託されたのが、東北民俗の会ということで、そこにわたしと、今日いらっやっています、[みやぎ民話の会]の小野和子さんと、同じ会のいまは東京にいらっやいますが廣瀬千香子さんという方が、東北民俗の会にも入ってたので、三人とも、調査の中の口頭伝承担当、つまり昔話とか伝説とか世間話なんかを調べましょうという担当になります。

そこでですね、じつは小野和子さんが、すごく画期的な提案をされたんです。どういうことかということ、「お

そらく、いわゆる昔話—形のきれいに整った、くっきりとしたストーリーのある昔話—は聞けないだろう。だから、そういう民話は聞けないだろうから、民話が聞けないこと、語られないこと、そのことを調査しましょう」とおっしゃったんです。ちょっとよくわかりませんよね。どういうことかということ、つまり、民話が語られたこと聞かれたことを、聞かれないこと語られないことも含めて、そのありさまを記録に残しましょうということだったんです。

具体的に言うそうですね、[村人の] 一人一人に対して、「むかし、子どもの時民話を聞きましたか？」たとえば昔話、伝説、なんでもいいけど「聞きましたか？」と聞いて、「聞かない」とか、「聞いた」とか[答えられる]。「それを大人になって子どもに語りましたか？」とか。もし民話を聞いてそれが昔話だったら、「始まりの言葉はなんですか？」とか、「終わりの言葉はなんですか？」[と聞く]。「ざっとむかし」とか、「よんつこさけた」とかそういう言葉ですね。それから、「どんな話を聞きましたか？」「もし語れるなら語ってもらえますか？」とか、「なぞなぞ知ってますか？」とか、「うた知ってますか？」とか。「わらべうたやあそび知ってますか？」とか。そういう項目を立てて聞いていったんですね。

【昔話の語り手 曾根つき子さん】 「おそらく、ちゃんとした昔話は聞けないだろう」と小野さんは予想したんですが、じつはお一人語り手がいらっしやったんですね。それが曾根つき子さんなんです。じゃあ曾根つきさんが見つかったからよかったかっていうと、それだけではなくて、じつは語られないこと、聞けないことを聞くことによって、もっと間口が広くすそ野が広いことが見えてきたんですね。

【聞き語りの風景とくらしの話】 どういうことかということ、たとえば、「昔話を聞いたことがあるけれども覚えてない」という方いっぱいいらっしやいますよね。覚えてる方より覚えてない方の方が多いでしょう。[だけど多くの方が] 覚えてなくても、その昔話そのものは覚えてなくても、それを聞いて語った場、くらしの中の聞き語りの場の風景は、じつに鮮明に覚えていらっしやるんです。

それから、「まったくそういう話を聞いたことがない」「稼ぐに忙しくてとてもそんな余裕がなかった」という方でも、じつは、くらしの中で聞き語りの場がなかったかということ、[決して] そんなことはないんですね。なぜかっていうと、[たとえば] ウサギ山といって、ウサギ捕りなんですけど、山にみんなで行って[ウサギの] 巻き狩りをするんですね。鉄砲撃ち、セコ達で、セコって追い出す係なんだけど。そのあとに飲み会をします。反省会というか、お疲れさま会をするんだけど、そこでは、あちこちで男たちが獺の自慢話や失敗話を、みんなあれこれしゃべっていて、「誰の話聞いたらいいか分かんないくらいだ」というんですね。

それから、すごく華奢な女性の方が、とっても貧しくて、親が早くなくなって、自分は男と一緒に木を運ばなくちゃいけない、[材木をつけた] ソリを引かなくちゃいけない。で、すごく怖かった。一本ゾリっていう飛騨高山から伝わってきたソリなんですけど、それを雪の山道をぐーっと、イナズマ型に下ろしてくるんですけど、その怖さをほんとに語りのように語られるんですね。面白いことに、さいごに「これ、むかしばなしみてえでがすぺ」とおっしゃったんですよ。

だから、そういうふうに、[話を] 忘れてしまっても、聞き語りの場の風景っていうのはその人の記憶にすごく強く残っているし、民話とは呼ばれない、もっとぼやっとした、漠然としたさまざまなくらしの話でも、それを語る聞き語りの場というのは、その方たちにとってはとても楽しい、意味のある場なんだということですよ。

【聞き語りの場が生まれるとき】 ひとつそれに関連して、そういう聞き語りの場、あるいは昔話を語ることを、あるとき急に始められる方もいるんですね。どういうことかっていうと、人生の転機において、そういうことが要求されるというのか、必要となるというのか、たとえば四十代でご主人が亡くなられて、奥さん一人で、小学生から中学生にかけての子ども三人を育てないといけない。父親代わりで働きながら、家事もするっていうときに、そうやって初めて昔話を語り出したそうなんです、お母さんが。なぜかという、[夜は] 電気が通っていないで真っ暗ですから、そこで子どもたちはなんか寂しげにしているから、それを励ますために何かを語らないといけないという必要にせまられたんでしょうね。激励のための昔話、聞き語りがあったんです。

そんなふうに、小野先生の意外な、というか画期的〔根源的〕な提案によって、この調査においては、話だけではなくて、その話のまわりにある、もっと漠然とした聞き語りの場とか、その周囲とか、背景とか、土台とかそうしたもののについても、いろいろ具体的ありさまみたいなことを記録することができたように思います、

【話の土台と果実】 いま〔これから〕みなさんに見てもらうつき子さん〔の話〕は、じつはそういう土台の上に、ちゃんとしたくっきりとした輪郭のある話を、そこから引き出してしっかりと語られる。土台もあるし、そこから生まれ育った果実である話もある、そういう方なんですね。

【升沢の開拓】 早速聞いていただきたいんですけど、あとちょっとだけみなさんにお話ししておきたいのは、升沢という土地ってどういう土地なのかってことですね。升沢は、やっぱり江戸時代前から村はあったようなんです。平家の落人が住み着いたといわれて、つき子さんのご実家もそのうちの古い家という早坂家の一つです。

平家の落人の集落ってというのは、なんにもない原野にやってきて、そこに住み着くわけですから、まず何が必要かという、水が必要ですよ。今のようないくつもある水道も電気ももちろんないですから、まず水を引かないといけません。だからそういう場所に川があったり、湧水があったりするところに行き、まず用水路を引くんですね。当時の升沢地区も、村中に水路が張り巡らされて、その水路がそのまま家の中の台所にひきこまれて、そこが水屋になってる。その水を使うんですね。田んぼにもそれを引いていきます。なおかつ、その水路ってというのは、ここに暮らした昔から先祖が作ったものだといわれてるものです。

【雪深さと交通の途絶】 そのような場所で、なおかつ雪がすごく深いです。今でこそすごく減りましたが、どこでも雪は半分くらいになったと言われてますが、多い時には二メートル三メートル積みますから、家の軒端までできます。だから人がやってくると、軒端から足が見えるんですね。「あ、だれか来たわあ。どこさ行くんだろ、うちかな」と思ったら、ずーと横行くから「ああ、隣に行くんだわ」となる。玄関は、その〔玄関を埋めている〕雪を掘り下げて階段にして、階段を降りて家に入ります。だから家の中は暗いんですね。

そのために、冬場は麓の吉岡とは、〔交通が〕途絶えてしまうんですね、行き来が。どうするかというと、秋のうちに食料を全部山に上げます。それで暮らすんですけど、米だの味噌だの魚だの。そういう米や味噌はどうやって手に入れるかという、米がじつはできない場所なんですよ。古い家は田んぼ持ってますけど、それではとても食べていけないので、どうするかというと、山から木を伐って薪にしますよね。それを川の水に流して色麻に売りに出します。そこで売った代金として米を持ってきます。あるいは炭を焼いたのを色麻の^{かけいり}かき入れというところまで下ろして、そこまで馬車が来るので、そこまで運び上げた米と交換して、今度は背負って上がる。背負っていった炭で米を買って背負ってくる。そういうところなんですね。

【山に生きる者たちの二面性—現実的対処と見えない山の世界】 きりがないのでそのくらいにして、そんなふうに、つき子さんのいた升沢地区の人々は、山と向き合ってくらさないといけない。山と向き合ってくらす人々の特徴として、二つの側面、二面性があるような気がしました、みなさんと付き合ってみて。なにかというと、山の自然と向き合って、現実のいろんな厳しさに対抗するために、現実的にいろいろ解決するための方策をとっていく、そういう現実的な側面。それと、山の向こうに、なにか見えない山の世界を見て、それを感じているという側面。人によってどちらかが強かったりするが、おそらく両方あるんだろうし、〔いろいろな強弱をもって〕両方持っていたりするんですね。じつはつき子さんも、その両面を持っていたように思います。大好きなお話を介して見えない山の世界と共感していたつき子さんは、日常生活では当たり前ですが自然に対して現実的に対応していく。

それと対照的なのが、つき子さんと一緒にお話を聞いたという〔同い年の〕姪っ子さんですね。同じように山仕事の親方からお話を聞くんだけど、つき子さんは、お話が聞きたくて聞きたくて仕方なくて、せがんで聞くんですね。絶対聞きたいから聞いた話は絶対忘れない。ところが姪っさんは、おつきあいで聞くので、「そんなもの覚えなくていいや」と忘れてしまう。

◆ 曽根つき子さんの語りを聞く ―

解説 小田嶋 利江 〈みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム〉

小田嶋一では、そんなふうにしてもらってきたつき子さんのお話を、まず聞いてもらいますね。キツネ話を今日みなさんに聞いてもらうので、最初にこれを見ていただきましょう。「キツネに仕返しされた薬屋さん」というお話です。

◆ 「キツネに仕返しされた薬屋さん」〈映像〉

DVD『黒川郡大和町の曽根つき子の語り (3)』

薬屋さんね、富山の薬屋さんね。

「遠いから、近くの家^{うち}はいつでも、夕方でもいいど。んで、わが^{うち}ねえ、遠いどご、先に廻^{まわ}ってきて、ほれがら部落を廻^{まわ}ろうな」

って、薬屋さん、むがしの薬屋さんは、なんつんだが、あの行李^{こりり}さいっぱい、荷物背負^おって、わだしら、覚えあるんだ。一週間ぐらい家^{うち}さ泊^{とど}めった、富山の薬屋さん。

夜は薬^{つぐ}作^つとぎ、みんなうちの家族の人たちみんなで、手伝^{たす}ってやったの。そういう薬屋さんだ思うわね。あの薬屋さんに聞いた話かなあ、わたしは。だれに聞いたんだろう、薬屋さんだ思うな。

ほして、そごに沼^{うみ}があって、沼^{うみ}の縁^{ふち}にブナの木があったんだって。大きなブナの木ね。そごの脇^{わき}さキツネが昼寝^{ひるね}した。

〈ああ、キツネの野郎、昼寝^{ひるね}してる。こっから、この石ぶつけてやったら、びっくりするが。キツネさ当^{あた}りだ当^{あた}りだんねがな〉

ど思^{おも}って、思^{おも}いなしに石、投げ^なげでやった。

キツネがびっくりして跳^はき上^あがって、跳^はき上^あがっていって後ろを向^むき、跳^はき上^あがって後ろを向^むきて、なあん回^{まわ}も後ろを振^ふり向^むいた。跳^はき上^あがった瞬間^{しゅんかん}に沼^{うみ}さ落^おったと思^{おも}った。

で、薬屋さん、

「ああ、おれもあれだっけども、おれに騙^{だま}されるキツネもあるんだな」

って、手叩^{てたた}きして笑^{わら}ったんだって、薬屋さんね。キツネは、本当は腹立^{はらだ}って逃げ^にげでいったんだろと思^{おも}って、薬屋さんいったの。

ほして、そごの家^{うち}で用足^{もち}して、

「ずいぶんまだ日^ひい高いなあ。日^ひい高いから、こご日陰^{ひかげ}だから、この木の陰^{かげ}さ、日陰^{ひかげ}さ少しお昼寝^{ひるね}すっかな」
ど、陽^ひの高いときにお昼寝^{ひるね}したんだけっけども、目^めえ覚^さましたっけ、真^まっ暗^くだったんだって。

「あれ、お昼寝^{ひるね}一時間^{いっしゅんかん}もしねえで、こんなに暗^くくなるまで寝^ねでだわけ^{わけ}でねえ。おっかしいな。んだって暗^くえんだなあ。仕方^{しかた}ねえなあ」

って、薬箱^{くすりばこ}、ほのブナの木の下^{した}さ置いて、ほごさこう木^きにおっ掛^かかって寝^ねでだ。して、夜^よお明^あげんの待^{まち}ってだ。

そうしたら、向^{むか}こうの方^{はう}からなんか重^{おも}い物担^ひいだ人^{ひと}達^{たち}、三^{さん}、四^し人^{にん}、

「よいさ、よいさ」

って、頭^{かぶ}さ紙^しの三角^{さんかく}のあれを鉢巻^{はちまき}して、来^きるんだな。

「だめだ、こりゃ、腰^{こし}かけったんで」

木の上さ上がって見た。木の上さ上がったら、

「やあや、重がった、重がった。こんなに重い物、初めて担^{はし}ったなや、担^{かつ}いできたなや。仕方^{しかた}ね、ござ下ろそう」
って、木の下さ下ろした。

「よし、ここでなにやあ、この辺さ埋めっかあ」

穴掘って埋めでいったんだってよ、その担^{かつ}いできた物をね。なにが埋めだものがわがんね、薬屋さん。

〈なにを埋めでいったもんか、わがんないな〉

「さあ、行く行く」

ってほの人ら、帰ったんだってよ。帰ったつけ間もなく、ほの埋めらった物が中^{なか}で破裂したんだって。

うん、バチッと破裂した、音^{おと}したんだって。ほうしたら、中^{なか}がら、ほら、細い手え出して、白い着物着て、ばさばさ、髪はばさばさしたのが、出はってきたんだってよ。木さ上がってね。

「待ってろー、待ってろー」

薬屋さん登れば、登った方さ、どこまでも手え伸ばして…これはあいっだなど思って、

〈仕方^{しかた}ねえ。も少し上まで上がっかな。細いどごまで上がったら来ねえがら〉

ど思って、細いどご上がってったつけ、木の枝折れでしまっわ、薬屋さん、枝とも、池さ落っでしまっわ。

〈あらっ〉

ど思って目え覚ましたつけ、まあだ太陽^{あが}が明るいんだって。

ほしたつけ、キツネがね、遠くにいて、手^て叩^{たた}ぎしったんだって。うん。笑ってんだって。

「はあ、おれがあれしたキツネが、俺^{おれ}どこ、お返ししたんだな」

そのとき、キツネが跳ね上がってね、喜^{よろこ}んで笑って行ったんだって。

小田嶋一はい、今のお話は、みなさんどこかで聞いたお話ですよ。『法印さまとキツネ』って言って、法印さんが仕返しされるお話なんですけど、これは、つき子さんのおうちに泊まった富山の薬屋さんが話して、その薬屋さんのお話として聞いたんだそうですね。そしてこの池の、ブナの木が生えた池は、つき子さんの知ってる、「ちょっと上に上ったあそこだな」ということを、イメージしてるんだそうです。だから、物語としてしっかりとした輪郭を持った話なんですけど、その一部分が現実とつながってるんですね。そんなお話です。昔話は昔話なんだけど、現実の場所とつながっている。

次に、やっぱりよくあるお話として、『キツネのお産』のお話を、再話として、倉林恵子さんに語っていただきます。

◆「キツネのお産を助けたお医者さん」〈語り〉

語り 倉林 恵子 〈みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム〉

あとね、これほんとの話だよ。

今どきでなく、ずうっと前のこと、馬で歩く時代だと思うのね。

ずうっと山の方さね。ほんとの山奥に山泊まりして、炭焼きしてたお母さんとお父さん、いたんだって。ほだから、家からよほど離れていたんだよ。ここの部落だか、どこの部落だかわかんないけどさ。

ほして、おっ母^{かあ}が赤子^{あかご}生^なしで、腹痛^{ふく}くなったからって、お父^とが婦人科の先生を迎えにいったのな。そのあたり馬で歩くしかないから、吉岡のどこかに、馬貸すところあったと思うよ。馬さその先生乗せてきて、ちゃんと赤ちゃん^な生^なさしえてね。男の子だっつけね。

先生、お産さしえて、
「一週間たったら、また来てみっからな」
って、帰ってきたって。

帰っていった途中でね、男の人が手え振って、止めらったんだって、馬を。
「どうしたの」
つたけ、
「うちのおっ母^{かあ}がね、今うんと腹病^{なかや}んで、赤ちゃん生まれとこだから、ちょっと廻って見てけねえか」
って言わたんだって。
「あれえ、さっきここ行くとき、おうちもなにもないと思って行ったのに。お父さんのうち、どこなの」
つたけ、
「じきそこなんだよ」
って。

そして男の人さついて行ったら、大きな家あった。その家の下が沼なんだってね。して沼の縁さ、なにの木だか、木が一本あったんだって。先生、
「こんな大きな家あったのかや。いかにおれ忙しいだって、この家見逃しして行ったのかや」
って、なんぼ考えても不思議なんだって。
ほしてそのうちのおっ母^{かあ}、やっぱりお腹病^{なかや}みしたから、ひとり産ませたっけね、
「あれえ、もうひとり、出はってくるわ、これ」
って、先生言って、ふたり産ませたのね。

お父さんはちゃんとお湯沸かしてね、赤ちゃんお風呂つかわせて。そしてちゃんと先生さ洗い場所もあてがって、お風呂はちゃんと片付けて、赤ちゃん寝かしてきたんだって。
ほして、
「どうもありがとう」
って、お父さんがね、お礼のお金さしあげて、道路まで送ってけたんだって。そこさ馬止めたから、先生馬さ乗って帰ってきたんだとね。
先生うちさ帰って、なんぼ考えてもね、
「あすこにおうち、あったのかなや」
って、不思議なんだとね。

一週間たってから、先生また来てみたんだって、馬でね。ほしたっけ、そこのおうちあったとこ家なくて、沼の縁の木の下さ、キツネの親子三匹いたんだってね。親ギツネが中に座ってね、両側に小ギツネちょこんと座って、親子で頭下げんだってよ。

ほんなもんだから、あとになって、
「先生、んだら、もらった金は木の葉でねえか」
って言われたから、先生、しまってたお金、出してみたって。したら、みんなの使うほんとお金だったんだって。
「不思議なもんだなあ。あのおうちん中さおれ入って、ちゃんと赤ちゃんを生^なさしえて、親子してちゃんとした。はあ、やっぱし、キツネのおうちさ入ってきたんだなあ」

って、先生言い言いしったんだとね。

小田嶋—ありがとうございます。とてもかわいい「キツネのお産」ですよ。気がつかれたかもしれないんですが、キツネのいるところに池があって、沼があって、そこに木、大きな木がはえてるっていう風景が「二つの話で」同じなんですよ。不思議なんですけれども、それからキツネが三匹、母キツネが真ん中で子ギツネが両側にいるっていう、座ってる形もかわいいんですけどね。

実は、最初「前半」の話は、山のお産なんですね。山に暮らす、山泊まりって言って、自分の家からずっと仕事場の山奥に行って小屋を建てて、そこに泊まっている、お父さんお母さんで、そこでお産するようになったんですね。すごく大変なんですよ。実は、当時のお産、升沢地区のお産は産婆さんも呼んでこれないものだったんですね。

なぜかという、下の麓の町から連れてくるにしても一度下がって、そこからまた上がってくるとなると、おそらく半日はかかるのでとても待ってられないので、お産は結局村の人たちだけでやります。近代になってからは別ですけども、それ以前は、「へその緒つぎ」のおばあちゃんと言って、とてもベテランのおばあちゃんがへその緒を始末したり、後産を始末したりしたんです。それから妊婦さんの面倒も看て、いろいろ養生させたりする、そういうおばあさんやお母さんたちがいたんですね。

お葬式もお坊さん呼んでる暇がないから、村人だけでお葬式をします。お経は読めないで、それ専用の唄念仏っていうのを坊さんから教えてもらって、自分たちだけでお葬式するんですね。自分たちだけで墓に運んで穴を掘って埋めます。病気のときもそうですね。お医者さんも呼んでられないので、どうしようもない時だけみんなで戸板に乗せて下までおろしたり、馬に乗せたり、あと背負って行ったり、そんな暮らしをしていたところなんです。

そういう大変なところでも、難産の時とかとっても大変な時は、やっぱりお医者さんを呼んでこなくちゃいけないので、このお話は、多分そういうところの情景なんですね、最初の前半は。それは現実の世界のお産、人間のお産でした。話の途中から、先生が山道を下っていくうちに、なぜか狐の世界に入っちゃうんですね。途中で狐の世界になって、今度は狐のお産を助ける。それで、帰ってきて、もう一回行ってみたら、今度は本当の狐と、まあそこが境なのか、人間と狐が顔を合わせることになるんですね。そんな風な構造になっているお話のような気がします。

まずみなさんのよく知ってる狐話として二つ聞いていただきました。今までで何か質問なり感想なりある方がいらっしゃったら、もしよろしかったら自由に出していただければと思いますけど。

◆ みなさんと感想や意見の交換

山田 [進行] 一小さな民話ゆうわ座ですので、どうぞ、このお話多分聞いたことあるよ、という方もいらっしゃると思うんですけど、どうぞこのお話を聞いた感想を。曾根つき子さんはこの時九十二歳で、九十歳から九十二歳の時にこのDVD 撮ったんですね。つき子さんは誰にもっていうか、大勢の前で話したこと一度もなかったんですよね。おそらくこのお話も聞いたのは、私たちが初めてじゃないでしょうか。そういう方の身体の中から出てきたこのお話なんですけど、多分ご存知だって、自分とこにもあるよっていうお話だと思うんですが、みなさんいかがでしょうか。

加藤 [民話 声の図書館] 一この話を聞いてね、私はこの升沢からもうひと山越えた根白石^{ねのしろいし}というところで、熊谷はつよさんっていう方からよくお話を聞いたんですね。はつよさんにもこの語りがあるんです。あの時代ですね、今のように携帯もない電話もテレビもないのに、ひと山越えた根白石にもこのお話が伝わり、多分皆さまがお住まいのところにも伝わっているのではないのでしょうか。はつよさんは、「この先生は、本当に居て若生先生っていう名前だよ、有名な先生だったんだよ」って私には話してくださいました。なんかすごく不思議な気がして、今聞かせていただきました。他の地域ではありませんか、志津川とかでは、こういうお話を聞きませんでしたか。

島津 [民話声の図書館] 一なかなか話は出にくいと思うんですけど、やっぱり私もこういうきつねのお産のお話は、南の白石でも聞いたし、実は飯館村のお話、菅野テツ子さんという方のお話を聞いてきたんですけども、菅野テツ子さんにもやっぱり同じような話があって、その他に、ご自分は実は自分を取り上げてくれたのが母方のおばあちゃんだったってということで、本当に昔のお産というのがとても大変な、今考えれば大変な状況だったんだろうなって思います。でもそれが意外と身近な普通のことだったのかもしれないな、なんて思いながらお話を聞きました。

この升沢っていうのは、私は一番初めて小野先生と一緒に採訪に行ったところなんですけど、吉岡のほうでバスの終点からひたすら歩いて歩いて歩いて歩いて、この先に人家があるんだろうかっていうような山奥で、途中何にもなくて本当に峠があったぐらいで、その奥にやっぱりあの船形山の入り口として村があったっていう場所。本当に、話らしい話は、私は聞けなかったのです。ここにこういうつき子さんという方がいらっしゃるってのは、それを見つけた、小野先生や小田嶋さんがすごいなということで、それを感じながらお話を聞いていました。

山田—いかがですか。志津川とかじゃ、仲松さん、はい。

参加者 A [仲松：志津川民話の会] 一南三陸町志津川からやってきました。初めてこの「ゆうわ座」の講座を聞きに来たんですけど、いつも二時からっていうんで、私たち遠いところからくるので、参加したくても、できないねっていつも話していたんですよね。でも、今日は参加できましたが、ちょっとすみませんけど、早めに引き上げないといけないんで、志津川よりももっと北の方から来てる人もいるんで、早めに失礼します、その点よろしく願います。

キツネのお話ですけど、方々にやっぱりキツネのお話はあるんですね。志津川にもありますけど、このお産の話は、本当にほのぼのとしたいい話だと思います。

志津川の話は、『キツネ壇』と言いまして、キツネの親分がやられたんで、お墓を作ってそれをキツネ壇として、ずっと子分たちが拝むっていうそういう話があるんです。

志津川には、キツネにだまされた男の人の話で、まんくそ、馬糞^{まんくそ}って分かりますか？ 馬糞^{まんくそ}って馬のウンチなんですけどね。そのウンチを、まんじゅうとしてお引き出物の入れ物に入れられて帰ってきて、家に帰ってきて、それ開けたら、なんのまんじゅうでなくて馬糞^{まんくそ}だったっていう話とそういう話が、志津川には伝えられてます。

その他にいろんなあれもありますけども、やっぱり同じようなお話で、ちょこっとどっか違うんですよね。どこかが違うのか、やっぱりそこが昔話伝説、そういう感じに受け取りました。

同じキツネの話でも、このお産の話でなく、私達の話は何て言うの、いつも通る今は国道四五号線で立派な道路なんですけど、昔は気仙沼って北の方に行くには、山々の峠を越えて行った。ある峠に、いつもキツネが出てみんなを困らせておどかしたり、持ってる物を取り返したりする悪いキツネが居だったんですよ。それで、勇気のある侍が、「ほんじゃ俺が行って退治してやる」って行ったんですね。そしたら、横たわった松の木があったんだそうです。「あれっ、行く時には、無がったのに帰りにあるとは、これはなんなんだ、この松の木は」って思って、もしかしたらって、触ってみたらびくびくしてたんだって。「あ、やっぱりこりゃキツネのやろうだな」って思って、それで、腰に差していた刀でキツって斬りつけたら、ギャッって断崖絶壁の海に落っこちていったんだって。そこが志津川湾で、キツネは落っこちたんですね。そして、その晩、海で仕事してた漁師さん達が、「何だ、あいつ何だ、見ろ見ろ」って。そしたら、その山の麓から頂上に明かりが、提灯行列がずっと見えたんですって。「なんだ、行ってみっか。そんでも気味悪いな。いい、いい。明日、昼間になったら行ってみっぺ」ってみんなで相談して、それで昼間になったらみんなで、おつかねがら、鎌だの鍬だのみんな金物を持って、そしてその山に登って行ったら、なんと高い高い石が積みさってあったんだって、その頂上に。「ありゃあ、何だこいつ」って見たんだって。「はあ、こいつは。昨日、おらだち見たのは、子分キツネが一所懸命、下の海からその石を運んで、このお墓を作った姿だったんだな」ってことになったんだって。

でもこの間まで、そういうところが実際にあったんです。もう年数が経っているんで、みんな崩れてしまっ
て、どこだか分かんなくなってるんですけど、確かにあったんだそうです、志津川には。はい、そういうお話です。失礼しました。

小田嶋—ありがとうございます。やっぱりキツネの話って不思議だけれど、何か現実^{じじつ}にそのものがあったり、その場所があたり、何か我々の世界とどこかで繋がってるんですよね。不思議なキツネの世界なんだけど、我々の現実世界ともどこかで繋がってる。背中合わせになってるっていうところが面白いかなと思います。

山田—やっぱりね、山のキツネ、キツネの話なんだけど、土地の暮らしがすごくこう反映されるっていうか背景にあるようなお話だなと、今志津川のお話聞きながら思ったんです。他にいかがでしょう、例えば若い人が聞いたらどうなのでしょう。その後ろの方ごめんなさい。急にアてて、お話は分かりましたか？

参加者B—まず、本当全然ちょっと視点が違う話で恥ずかしいとか、申し訳ないんですけど、曾根つき子さんって後^{うしろ}から読むと、「こきつねそ」、って。だから、何かすごいキツネの話が「あつ、つきさんが語ってる」、キツネの話っていうこと自体が私からすると大きなお話に思えるというか、入れ子構造になっていると。

平家の落武者が住まわれた土地のことだから、なにかその、キツネっていうことに例えられている。なんて言うか、言葉にやっぱりならない。なにか先祖のキツネだけれども、先祖先祖をたどれば、そういうふうに、

なんて言うのかな、人間扱いされなかった村の集落の仲間ではないけれども、実はその端の方で生きていた人達との交流を何か言い伝えているのかなとも思います。それがこうあたたかい話になっているのが、今集落の仲間になっているっていうところに、こうやっぱそのさっきの分水嶺のお話じゃないですけど、流れが何か大きいところこう繋がっていて良かったなって。

小田嶋—ありがとうございます。なにか今の視点面白いですね。キツネは、やっぱり自然の野生動物の一つの象徴でもあるけれども、人間社会のそのなにか一部分の、中心から外れた片隅に生きる人達の象徴でも、もしかしてあるのかなっていう視点ね。とても面白いなと思いました。ありがとうございます。

参加者C—どうもありがとうございました。あのお産のほうですね。面白く聞いてました。何が面白いかって言うと、やっぱり最初人間のお産の話があって、お医者さん出ていくんですよ。で、その後に狐のお産になって親ギツネ、お父さんギツネが大活躍するんですね。要は、お産をするっていってお母さんギツネがお腹痛めてる訳ですけど、必死になってお医者さん呼んで来て、お湯の手配までして、風呂も片付けてお金も渡して。で、やっぱり何かそういうのを見ると、キツネの方が、お父さんギツネのほうがですね、子供を産むとかですね、子供を育てるっていうことを女性の仕事としないでやってる。で、要は、先程お話になりましたけど、へその緒を切ってくれるお婆さんとかですね、面倒を見てくれるのが人間の場合はどうも女の人の仕事にされていて、それに対してやっぱりなにか動物の方は、今はもう出産に立ち会う男性とか多いんでしょうけれど、なにかそういうのを考えるとキツネって偉いんだなっていうようなのですね、思いながらやっぱり何かそういう話が伝えられてるっていうのもまた面白いなと思いながら聞いてます。ありがとうございます。

小田嶋—ありがとうございます。面白い視点ですね。

山田—ちょっとだけ聞いたことあったんですが、ここで結局お産婆さんが間に合わないわけでしょ、産婆さんとかお医者さんが。その時には、近くの慣れてる人が産ませるけど、中にはそのお父さんに生ませ方を教えて、そしてお産をさせたっていうふうなことも、ちょっと聞いたことあったんですけど、小田嶋さんはどう、聞いたことないですか。

小田嶋—その辺はちょっと分かんないけれども、山の人達っていうのはかえって何て言うのかな、男の仕事女の仕事っていうのをそんなに気にしないところがあるかなっていう気はしますね。やっぱり男は山の方で木を切ったりなんたりしなきゃいけないから家にいられないっていうのがあるので、隣近所のおばあちゃんたちがやってくれるんだけど、男も実はその山の小屋にいる時は、食事は自分で作ったりするので、そんなに男の仕事女の仕事っていう、いわゆるそういう固定されたことは、あまり気にしないような気がします。

山田—ありがとうございます。他にどなたか。じゃあ、はい。

参加者D—私は富谷市から参りました。それで、今先生方からお話いただいた升沢地区っていうところが大好きでして、船形山のすぐ^{はたさか}旗坂キャンプ場っていうところがあるんですけど、その辺の景色がものすごく素晴らしいところなんです。で、毎年のように升沢地区の方は行っておりました。それで^{かざこし}風越峠 [^{かざはや}風早峠] っていうところは、湧き水がものすごく出てましてね。そこの水がおいしいんです。ですので、皆さんあんまり関係ないかもしれないですけど、吉岡からちょっと行ったところで素晴らしい景色のところですので、是非行ってみたい

ただきたいなと思います。

それから、実は私ですね。山田先生が小学校の時に娘がお世話になりました。それで、三十年前なんですけれど、先生のご紹介で小野和子先生が「猿の嫁になった娘」っていうお話をしてくださったんです。それはもうずっと私も耳の中に残っておりまして、今回もちょっと本を読ませていただいた時にあの時の感動がものすごく出てきました。

それで、今日は先ほどお話いただいた方の方言の語りですね、ほんとうになんて言うか、こういうふうなお話を聞いた時って、心がなんか癒されるって言いますか、普通にただ本読んだりするよりも、ああ、人からこういう風にお話を聞くっていうのは何年たっても覚えているんだなって。その時の猿になった娘さんのお話も思い出しながら、こんなに心地いいものなんだなっていうことを思いましてですね。ですから、やっぱり子供たちにも絵本の読み聞かせとか、そういうのもいかに大事かなっていうのをつくづく思いながら聞かせていただきました。

で、私は娘がね、よく「学校でズーザー弁分かんない」「お母さん『ざずずずつい』ってどういうこと」とか『きょっぱり』ってどういうこと」ってよく聞くんですけど、私はその言葉に何でも答えられるんですね。で、ちょっとラジオ体操の仲間とも、「こういう方言は絶対なくしちゃ駄目だよ」って、『ごしゃがれる』とか『たごまる』とか『もじゃぐれる』とかそういうのを普段でも使いましょう」っていうことをお話ししております。関係ないことでごめんなさい。

山田—ありがとうございます。それではまだまだお聞きしたいんですが、後半はつき子さんの本領発揮って言うんですか、すごくキツネのお話は益々面白くなっていきますので。ちょっと休憩挟みまして後半に入りたいと思います。じゃ七、八分したら始めますので。どうもありがとうございます。それでは前半終わります。

《 休 憩 》

◆ 曾根つき子さんの語りを聞く 二

解説 小田嶋 利江 〈みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム〉

山田—それでは、また後半始めたいと思います。では、小田嶋さんから後半の話の映像についてのお話がありますので。

小田嶋—最初の二つはよく聞いたことのあるストーリーのあるようなお話なんですね。で、いろんなところに同じような話がある、ストーリーのあるお話なんだけど、今度はもっと色々雑多なキツネについてのいろんな、まあ言い伝えというか、なんかそういういろんな小さな話があるんですけども。キツネっていうのは山に住んでいる方でも、本当の野生のキツネをそんなに見ることはないんだそうです、実際にはね。目に見ることはそんなにないんだそうで、どういうふうにしてキツネをキツネって感じられるのかっていうと、姿ではなくて、さまざまな光だとか音をキツネだと思うんですね。

【狐火】 例えばよくあるのが〈狐火〉〈狐火〉^{きつねび}ですよね。これはよくあるのは、山の向こうに提灯のようにポツポツ付いてたり、グーと動いたり、それがポツポツポツと消えていったりするのを、麓の方では多いのかな、そういうのをよく狐火と言うんですけど。つき子さんはもっとちょっと強い光のようなものを狐火と考えてるらしくて、とっても明るくて夜歩いてるとそばをキツネが通ると、そこがパッと明るくなるんだそうです。で、その下に落ちている針も見えるくらいに、真昼のように明るいって言うんですね。だからよく聞く狐火ともまたちょっと違う狐火なんですね。

【狐の嫁入り】 それから、〈狐の嫁入り〉っていうのもよく聞きますよね。〈狐の嫁入り〉って言うと、その狐火の提灯のような光がずらっとこう行列をしていくのを〈狐の嫁入り〉と言ったり、あるいは天気がいいのに雨が降るのも〈狐の嫁入り〉というところもあるけれども、つき子さんのいう〈狐の嫁入り〉は、向こうの山に嫁入り行列が本当に見えるんだそうです。で、真っ暗なんだけど、それそここのところがはっきりと見えて、その行列してる人達の着物の柄まで見えるとかいうんですね。なんかすごく不思議なんですけれども、そういう狐の嫁入りは、つき子さん本人は見たことないけれども、みんな「多くの人が」見たことあるんだそうです。

【狐穴】 それで、もう一つ、その狐の嫁入りが出るとよくやるのが、〈狐穴〉^{ほく}っていうおまじないなんですけれども、よく外では〈狐の窓〉^{ほく}って言ったりするんですけど、手を組んでそれをひっくり返してそこから覗くと化け物の正体がわかるってよく言うんですけど、そこから息をフッと吹きかけると〈狐の嫁入り〉がぱっと消える。で、正体が見えたり、そうしたものが消えたりするっていう、さまざまそういう狐の不思議なことは、光だったり音だったり、そんなことで表わされるんですね。そんなことで狐の存在を感じているようなんですけど、そのそんなふうなお話ちっちゃなお話をちょっと聞いてみます。

◆ 「赤いねんねこ着て赤ちゃん背負ったキツネ」〈映像〉

DVD『黒川郡大和町の曾根つき子さんの語り（4）』

雨の降る朝だったんだね。うちの部落から何だろな、あの山の、今だら船形山さ登って行くよに行くどこ。右っかわの高いところに家^{うち}あんのよ。そこに三軒あったのね。その三軒の向こう端のおじいさんがちょっと足不自由なのよ。

「今日雨降るからさ、みんなとお話してくて今日山さ行がねでさ、こっちのほうさ下がって来たんだや」って言ってたの、おじいさん。

「さっきさ、来たっけな、雨降ってなや、若い母ちゃんなや、うんと^{うづ}美しいねんねこ着て、赤ん坊ギャーギャー泣かしえて川のほうさ降ってくんだっけど」

「あら、ほだら追っかけてったらいがったべえ」

って、誰だと言ったっけ、

「雨でも降んねえばさ、どこさ山のほう行くんだって、追っかけていがったっけども、雨降ってからおれも濡れるの嫌だから、見てばり来た」

「だれ、雨降っ時、赤いねんねこ着た娘さんがそっちのほうさ行ぐわけねえ、キツネでも見たったべや」

そう言った、そこのおばあさんがね、

「あれキツネかや、だなあ、キツネでねんだっけ、すっかり人なんだっけ」

「おめえさあ、おめえほんな雨降っ時、朝からうらからって歩いてくっからキツネに出っくわったんだ、キツネちゃんと体変えてよ、^{ちけ}若え娘に見しえらってわ、歩ったらばおれの後追っかけて来るんでねかなと思って。キツネさ、そいつあ」

なんてお母さんたち語るんだった。キツネってほいな姿するのかやって、私思ったのね。

「ほんとに追いかけて行くくれ、美しい姉さまだった」

「川っ淵まで追っかけで行ってみればいがったっちゃや」

って、誰だと言ったっけ、

「だからさ、おれも濡れんの嫌だから、追っかけで行かねんだけど、雨でも降んねえば、追っかけだがしねえ」

そう言うんだっけよ。

◆「赤ん坊の泣き声で誘うキツネ」〈映像〉

DVD『黒川郡大和町の曾根つき子の語り (3)』

あれはね、冬にね私、^{うち}家のお父さんが、部落のなんかで飲み会があったんだと思うんだよ。そして、^{うち}家さ電話がきたのよ。

「あんたあ、お父さんがね、迎えに来いって言うんだよわ」

「なにい、あたし奥まで行かねきゃねえのかや」

「だって来いって待ってるから来たら。早く来てさ^{うち}家でお茶っこ飲むべし。来いっちゃ」

なんて友達の人、電話よこしたから、

「なにや私雪の中やあそこまで行かねばねのか」

って思った。でも、雪降っても道路は付いていたからね。あそこの馬頭観音様つのあるのよ、分校の裏にね。いつもここでさ、たもんつあんっていう人がキツネにひかされて、ここのへんうらうらって歩いているそうだから、なにか音するのかなって思って、私ちょっと聞いてたのよ。

いやあいや、雪の中ん山道のほうで赤ん坊の声するのよ。

「ばかだなあ、おまえらな」

私こう言ったのよ。

「だれが雪の中に赤ん坊いたのがや、そいつ探ささ行ぐやついだのが、だれもいねえ。おれもばかだけど、おめえらまたばかだな」

そして、また迎えに行ったのよ。したっけ、

「さあ、ほんで終わったから行くべや、かがちゃん」
「一杯飲んでいったら」
「私さ一杯出したらさ、一杯二杯で止まんねえよ。ほだからいいわあ、家^{うち}さ行って飲んだ方がいい」
なんて、私来たのよ。馬頭観音様のところで、
「父ちゃんちょっと止まれ」
「なんなんだ」
「あれっ、向こうに赤ん坊の声すっと。あっちに赤ん坊いたがって、探^うしさいくが」
「だれえ、こんなひどい日に、川はあっぺし、川さ落ちたってや、キツネ助けさ来ねえべや。ばかなやつらの話聞いていることねえ、あべ、あべえ」

◆「キツネ火に送られてきたお父さん」〈映像〉

DVD『黒川郡大和町の曾根つき子の語り（4）』

ちょうどお正月にならない、十一月ころかな。家^{うち}のお父さんが、ちょっとどこかが行ってくっからなって帰って来ねえ。ああ、お酒ご馳走^{ちそう}になってるんだなあ。懐中電灯持ったから門灯つけておかなくてもいいけども、ほでも私つけておいたのよ。

お父さんが懐中電灯つけてね、お酒ごちそうになった家^{うち}から出はって家^{うち}さ向かって来た。
一軒目のどこさ来たっけ、懐中電灯でなくて後^{うしろ}から明かりが点くんだったけね。

「あれっ」

と思って、

「おれの懐中電灯より明るいな」

自分の懐中電灯消してきた。ずーっと送られて来たんだって。そして、家の入り口に来たっけ、その時まだ、こたつさあたってたの、寒いからね。

「やあやあ、どうもありがとうね、ありがとう」

「だれと来たんだべ、ありがとう、ありがとうなんて」

「やあ、今来た」

「だれと来たの、一緒に？」

「だれだかわがんねえ、松明^{たいまつ}で送らってきた」

「松明^{たいまつ}？ 今松明^{たいまつ}もう使う人いねえべや。皆懐中電灯、どこの家^{うち}でも懐中電灯持ってんだべや」

「おれな懐中電灯点けて、暗いから消して、松明^{たいまつ}さ頼って来た」

家^{うち}の前さ来たっけ、松明^{たいまつ}パット消えてしまったんだと。

「『ああ、こんどおれは、こっちさ行けば家^{うち}さ行くんだなあ』と思って、『どうもお世話さま』って言って別れて来た」

「あらあ、なんだい、松明^{たいまつ}つつこと」

と思ってね、次の日隣のおばあさん、小川さんの家^{うち}さ私行ったのよ。

「ばあちゃん、夕べね、おら家^えの父ちゃんがお酒ご馳走^{ちそう}になって家^{うち}さ帰ってくるときさ、松明^{たいまつ}つけた人に送らって来たって言うんだけども、松明^{たいまつ}ってなんだい」

って。

「今、松明^{たいまつ}持っている家いないべ」

そのおばあさんも言う。

「なに、そんでキツネに送られて来たんでねえか」

「キツネっ火^ひってどんなの？」

って聞いたの。

「キツネってのはな…」

キツネがそばを歩くんだって。そば歩^あって、息をハアッと吹いたっけ、^{ないまつ}松明がパパッとこうあがるそうだって。息がハアッとね、そして青光パパッと上がる。だから、足元がうんと明るいんだって。

小田嶋一三つ、小さいお話を聞いていただきました。とても面白いですよね。ここではキツネの姿は全く見えないんだけど、不思議な声が、赤ん坊の泣き声がしたり、赤ちゃん背負った美しい姉さまの姿を見たり、それからあの^{ないまつ}松明のようなすごく明るい明かりがそばを、お父さんのそばをずっとついて照らしてくれたりするんですね。何かとてもあの赤いねんねを着たキツネなんてすごくあでやかで、あでやかでもあるし、あやしくも恐ろしいような感じもするし、赤ちゃんをギャンギャン泣かせて川のところに入ってくな^いていうのは、何かとってもすさまじい雰囲気なんですけども。で、赤ちゃんの泣き声でこっち来いよみたいに誘うのもとても怪しげなキツネの現れなんです、最後のお父さんを送ってくれるあかりってというのは何か人間に友好的な感じも助けてくれるような感じもして、キツネもいろいろな付き合い方をしてくれるのかな^いってのが見えて面白いと思います。

これらは、ちっちゃな姿の見えないキツネの話ですが、最後はキツネの姿が見えるお話を二つ聞きたいと思います。

◆「子連れのお母キツネに忠告する」(映像)

DVD『黒川郡大和町の曾根つき子の語り (3)』

うち、夕方ね、隣の家でお茶のみして

「夕方だからさあ、帰って行くかな」

って家^{うち}さ帰って来たのよ。家^{うち}さ帰るちょっと手前に山岸に畑あるのよ、船形荘の畑ね。

「キツネ出はって来てトウキミ（トウモロコシ）を食^かれる、食^かれるって言うっけ、まさかその辺にいたんでねえべ^いっちゃん」

いたのよ、山岸にキツネ三匹、お母さんを中^なんなってね、あたりさ子キツネ。

「よしっ」

こんど私こ^こっち向かいの道路さ腰かけて、

「こんにちは」

って言ったのよ。キツネびっくりして、

「おまえたちか、毎晩出はって来て畑さ来てトウキミ食べんの。今まではトウキミ食べておいしかったろな」
そう言ったのよ私。キツネは黙^もってるんだ。

「今度はな、畑にえらい仕掛けものあるんだから、命要^{いのち}らねえと思えば、畑さ入^いっていたずらしてもいいんだけど、これからは気をつけねきゃねえよ。お前より子供たち先に死^しんじゃうんだから」

そう言ったのよ。

そしたっけ、ぴよこんと親キツネ立^たったのよ。そしたっけ [子キツネ] 後^{あと}から追いかけてきて、何回も後^{あと}

振り返すのよ。

「何回振り返すたってね、このばんちゃん変わりねえんだ。こんなばんちゃんいねえべや」
って、口曲げたり赤目はだけたりしてやったのよ。その年はね、どっこの家^{うち}もトウキミ^か食れなかったのよ。
「そりゃ良かったなや、ほんでおめえ、今度会ったらまた言ってけろな」
「会えばな」

小田嶋一面白いお話ですね。お話というより、これは本当の体験談、つき子さん自身の体験談で、あの野生のキツネに忠告をしたお話なんですね。実話というか現実のお話なんだけど、何かとってもキツネの世界と繋がってるような雰囲気があって楽しいお話ですね。で、その狐の姿、あの座ってる姿が、母ギツネが真ん中にいて両側に子ギツネがいるっていうのが、最初の物語「キツネのお産」の中のキツネの姿と重なり合うようで、それもなんとなく不思議な感じがして、何とも言えない味わいのあるお話ですね。じゃ最後にこれも実話のお話をさせていただきます。今度はやっぱり倉林さんに再話をお願いします。

◆「お母さんになって子どもを抱いていたキツネ」

DVD『黒川郡大和町の曾根つき子の語り(4)』

わたし、「そったな話あるもんだかや」って思ったっけ、やっぱしあるんだわね。キツネはね、お母さんなって小さい子どもを連れてくの。

うんと、馬市盛りのときだなあ。

吉岡^{よしおか}の馬市あってね、大衡^{おおひら}の子どもが、みんなで馬市さ見さ来て、そしてほら、どやどやと別れて、みんなして大衡さ帰るんだったとな。吉岡下町^{しもまち}の青萬^{あおまん}さんってね、あそこの屋敷^{たいげい}まで大勢して行ったんだ。

子どもの親も、その人達さ混じって入^へっていったって。それから、みいんな別れたれば、はっぱりお母さんいねかったんだって。

「あら、母ちゃんいね、どこさ行ったんだろ。わたし、どこさ行けばいいんだろ」

って、立ってたら、お母さん出はってきて、

「ああ、ああ、こっちさあべ」

って、連れてかれたのね。

子ども見えなくなってから、みいんな、ばらばら、さがしてさがして、それでも見えなくて、三日さがしてもいなかったって、その子ども。

親類のおじさんが、

「なんかなあ、いま一箇所、さがしてみてえとこあるな。そこの川縁の笹もだの中なんだっけなあ」
って言ったから、

「この辺かな、この辺さな」

って、おじさん、先んなって歩いてって、川原の笹もだの厚いところさ行ったっけ、そこにいたんだって、その子どもね。キツネのお母さん、寒くしないで、暖^{あたた}かくして、抱っこしていたんだってよ。

ほしたっけ、そのキツネがね、大人の人们来たら、その子ども置いてさっと逃げたんだって。子どもは、
「母ちゃん、待ってろ、おれも行く」

って、わらわら起きて、追っかけたってよ。キツネ、母ちゃんになって、抱っこしてたんだっちゃ。

あとで子どもに、
「なに食^かしえらったんだ」
つたっけね、まずジャムパン食^かしえらったって。買ってきたものか、さらってきたものか、たしかにそばに
パンの袋あったんだって。それから、
「夕べはね、赤いご飯食^かしえらった」
って。赤いご飯ってゆのはね、テントムシ赤いわ、あれを混ぜたの。なにして混ぜたものか、なにして食^か
えたものか、口元にテントムシのかけらついたから、食べたんだわね。
「キツネは連れてったってね、殺さねんだよ」
って言うわ。なにかかにか、あつかってけるんだね。

小田嶋一ありがとうございます。最後の話もとてもいいお話ですよ。これも本当の話、実話として語られてるん
ですね。本当にあった話なんだけれども、何ともいえずなんか怪しいような、てんとう虫食^かせられて、でもあった
かいような懐かしいような不思議な感覚の話なんですね。本当の昔話にはちょっとない味わいがあるんじゃないか
なと思います。曾根つき子さんのキツネ話っていうのはまだまだあるんですけれども、中でも皆さんにぜひ聞いて
いただきたいと思うのを幾つか選んで見て聞いていただきました。

◆みなさんと感想や意見の交換

山田—いかがでしたか。つき子さんのもう今では戻ることのできない、ね、升沢のこう風景が広がってきたかなとも思いますけど、みなさん何か感想あったらお願いします。質問でもいいですし。

参加者E—いろんなお話楽しかったです。利府町から親子で参加してみたいです。実体験ということで、トウモロコシを食べたキツネの話というか、聞いた時に思い出したのが、うちの実家でもトウモロコシを何か動物が運んでるのか、こう茎が折れたのが落ちてたんです。で、「何かが持ってるぞ」っていうことだったんで、何の動物だろうと思ったら、隣の方が夜中にキツネではなくてタヌキがですね、引っ張っててるのを見てたっていうんですね。で、何日かおきにこう引っ張って持ってきて、「誰がトウモロコシ食べてるんだ」と思った。「タヌキ近くにいたんだね」っていうのをちょっと思い出しました。

で、ちょっとタヌキつながりじゃないんですけど、うちの子ども緊張してこういう場所に来ると固まってしまいうんですけど、学校でもちょっと教室に入れなくて、今サポートルームってところに行ってるんです。で、そこの外部の先生なんですけど、何かこうお話ししてる時に、「あたしのお祖母さんから聞いたお話で妖怪とかタヌキに化かされた話を話してあげるね」って言われたんです。で、私が、「あっキツネじゃなくてタヌキなの」って言ったら、「何かタヌキって言ってた」って言って聞いてきた話なんですけど。タヌキではなくてお化けの話なんですけど。あんまり話をするのが苦手だし、物語もあんまり興味のない子がその聞いてきた話を私に話してくれたのに感動して、この場に連れてきて、その聞いた昔話とかおばけの話を是非皆さんに聞いてもらいたくて、本人嫌々なんですけど、ちょっと語ってもらいたいなと思って、話してもらいたいなと思って

……

中略（何度かお母さんが子どもに話を語るよう促すが、子どもが語らないため、お母さんが話の筋を説明する。）

……

すいません。なんかしゃべるのも緊張するみたいなんですけど、私に語ったのは、本人が言うには、神社があって、そのそばに木があったそうです。で、その木のそばに一つ目小僧が出るということで、その一つ目小僧が「相撲を取ろう」って言うらしいんだそうです。で、子供たちは相撲取っても負けてしまうんだそうです。なので、大人たちが、相撲、大人だったら負けないだろうって、一つ目小僧ちっちゃいんだから子供負けるなら、じゃあ俺たちが負かしてやろうっていうことで、大人たちが勝負するんだそうです。でも、勝負をしても負けてしまうということで、負けるとその一つ目小僧の「うんちを食べろ」って言われるんだそうです。でも、負けたから食べなきゃいけないんじゃないですか。食べるとそれがおいしいんだそうです、どういうわけか。うんちがおいしいらしくて、どの大人がやっても負けて、やっぱり食べるとおいしい。なんですけど、結局その正体は、その神社のそばの木が桃ノ木だったそうです。で、桃の木の精が、[実が] 熟してしまっって、そのもったいないというか、食べてほしくて、一つ目小僧になって化けて出て来たんだっていう感じのニュアンスの話を聞かせてくれたんです。

けど、それと一緒にその話してくれた方がですね、同じ神社関係のことで、お参りをした後に手をこすると、ご飯の匂いがするそうなんですって。で、そのご飯の香りがすると、その日はやっぱりおんなじ家のご飯と同じ匂いがするっていう話なんです。で、ある時、手をこすったらカレーの香りがしたそうなんです。神社で、お祈りしてカレーだって思ったら、その晩はカレーだったそうなんですって。で、あっカレーの匂いがする。やっぱり当たるんだっていうのは、その子供たちの間で、噂になってたみたいで。ある時、お参りして手をこすったら何の匂いもしなかったそうなんですって。で、あれ、いつもご飯の匂いがするのに匂いがしないぞ。

なんでだって思ったらしいんですけど、なんか子供の話では聞くとところによると、遊んで歩いて帰り遅くなったそうなんですって。それで親から怒られて、お前今日ご飯抜きと言われてしまって、それでご飯が出なかったの、だから、ご飯の匂いしなかったんだ、っていう話を聞いてきたのが面白かったらしくて、私にそういうお話を聞かせてくれたんです。

で、興味を持って話してくれたのがうれしくて、できれば、こう本人の口から語ってもらいたかったんですけど。ちょっと抜け落ちながらあたしもうんうんなんて聞いてた内容はざっくりこんな感じだったんですけども、すいません、なんかお時間取らせて申し訳ありません。ありがとうございます。(参加者拍手)

小田嶋一面白い話ですね。

山田一面白いお話で、えーありがとうございます。えーっとじゃあ他の方でどなたかどうぞえーとはい。お願いします。

参加者 F—入ったら面白い民話だったんですね。ここへ来たのは初めてなんですけども、倉林さんの語り方がね、どんどん方言を交えて語りかけてくる。相当聞く耳にいいなって、素晴らしかったですね、つかみはオッケーですね。話に引き入れられたのね。「ほんとだよ」とか働きかけてくれるんで、一瞬えっと身を乗り出すわけ、ほんとに素晴らしい。

なぜ、ここに立っているかという、実をいうと、ここの館長の鷺田清一先生と、それからロバート キャンベルさんと一緒にウクライナの詩人の方がいらして、一階に来たんですね。私も出席してて、一応は言おうかと思ってたんですが、その場で思ったんですよ。まさにその時代にあった、実際、生の声を伝えて意見は言わなかった。意見を述べてるだけ。ああでもないこうでもないって言わない、これが素晴らしい。なぜかという、家庭教師をやってみてね、子どもたちとやったときに、教えるというより一緒に学ぼうという感覚でやったりすると、子どもたちは反応があるんですよ。要するに人間っておもしろいかなと思って、そこに関心を持っているんです。

今日も話を聞いてて、グリム童話でも、アンデルセンでも、お伽噺昔のね。桃太郎だっていろいろ覚えている。いろんな童話がありますね。あれはなぜかという、昔は、教訓として子どもたちに教えたり、それから民話を聞いて、昔の学校とか文字がないときには口でやっぱり伝える。それがこう面白いのよ。ただ言っても伝わらないからおもしろおかしくね。それを覚えてもらって、そして、教訓にしておもうってことがビンビン伝わるわけですね。

皆さん、先輩たちが昔の方がいろいろ工夫して、実体験に基づいたり、あるいは言い伝えもね、うまく子孫に言い伝えを教える。そして、いつでもいいように、またあわないように、それを聞かせて、いろんな人間関係といますかね、時代背景を考えることは素晴らしいと思いました。

それから、まず第一に声を聞くということからのスタートが素晴らしいことで、賛同いたします。そして、こういう輪を広げてほしい。我々だけでなく若い方に対しても広げてほしい。一緒に広げていきたいなと思っています。ありがとうございました。

山田一ありがとうございます。キツネ火って、さっきお話あったけど、キツネ火って、遠くに見えるんだけど、すぐ下の足元にあるっていうのを聞いて私は意外だったんですけども、その話で思い出すのがあって、お聞きした話の一つあるんです。

鬼首ってところで、あるところで、お嫁さんがね、とても辛くて辛くて赤ん坊をおんぶして、もう家を出よ

うと思った。真っ暗な山道を出て逃げて帰ろうと思った。そしたら、自分の足元のところをぽっと点してくれるのがあったんですってね。なにかなあと思ったら、それはキツネだったって言うんですよ。だから、実はキツネ火って遠くに見えるけども、自分の足元にあるんだよねって、その話をしてくれた人が言ってくれたんですけど、実は、そういう現実のすごく辛いこととか、そういうこととかをキツネに寄せてお話しして、こうやって語り伝えていくところが、すごいなあというふうに思ったので、私は、キツネ火っていうのが結構つき子さんのでは心に残っています。

じゃあ、せんだいメディアテークにおられた清水さんも、つき子さんのお話、昔話を聞いたのは初めてでしたよね。あのときのことなどを、つき子さんのお話を一緒に聞いた清水さんにお話ししてもらいます。

参加者G〔清水チナツ：元メディアテーク勤務〕 一々につき子さんの映像を見ると、なんかお会いして目の前で聞かせてもらっていたときのことを思い出すような雰囲気です…。でもやっぱり、つき子さんの語りのすごく不思議なところは、他の語り手の方は、「むかしむかし」とかここからお話に入りますっていうようななにか合図があって、お話の世界に入っていくって、終わりも言葉、結末みたいなのが来て、お話が終わるっていう方が民話の語り手の方たくさんいらっしゃると思うんですけど、ただつき子さんの話、ほんとに毎回すごく不思議だったのは、なんかこう最近あったこととか、自分がかつて付き合いのあった人の世間話のようなものを聞いてたと思ったら、いつの間にかお話の世界に入っていくって、それで現実との境がいつもわからなくなったまま、私たちもなんかこう狐につままれたような気持ちで終わるっていうようなあの感じが、なんかいつも印象的だったなと思い出しました。

あと、ジャムパンの袋って言われたときの衝撃が、私も覚えていて、なんか昔話を聞いているようなテンションで聞いていたら、いきなりジャムパンとか懐中電灯とか、なんか私たちがこう身近に知っているようなものが、ぽっと出てきたときに、やっぱりなんかお話しって、どこか離れた世界の別のところにあるものじゃなくて、本当に地続きで、つい身近なところにも転がっているものなんだなっていうのを、なんか淡々と語るつき子さんの表情を見て改めて思い出していました。

山田—ありがとうございます。時間が残り少なくなりましたので、じゃ若い方二、三人にちょっとお話ししていただきたいと思います。

寺嶋—先ほど、そちらの方がおっしゃっていた、ロバート キャンベルさん。僕も実は先月メディアテークで開かれたときに見にいったんですけれども。ウクライナの詩人さんが、戦争の中に居るウクライナの人たちにインタビューして、本を出版したっていうことで訪日したんですよ。それに僕も参加していて、その本っていうのが『戦争語彙集』っていうタイトルで、なんか日常的な言葉の数々が、その戦争を節目に言葉の意味が変わっていくみたいな、そういうことを焦点に置いて、それでインタビューしていたっていう感じだったんです。

だから今回のこれと絡めて思ったのが、ああ、じゃあキツネとかそういう昔話、民話の中に出てくる言葉っていうのも、まさに現代と民話で語られるその言葉の定義っていうものが、がらっと変わっているんだなってことを、さっきの方のウクライナの話聞いていて思い出したので、そういうことを考えてたっていう話です。どうもありがとうございます。

小田嶋—ありがとうございました。あの、今言っていたこと、現実のお話をしながら、暮らしの語りをしながら、それがいつの間にか物語、お話の世界になっていくっていう。そのキツネが、現実のキツネとか、それが、キツネの世界に繋がっているという、そういう感覚ですね。それが、つき子さんの持ち味なんで

すけども、それをこのDVDの映像で残す、記録できたらいいというのが最初のねらいだったので、もしそれが感じられたなら、それは凄く嬉しいことだなあと思いました。

つまり、日常の暮らしの話、よもやま話をしている中で、何かふわっとこう、そこに物語が浮かび上がってくる。そういうところが、もし記録できているならば、それは凄く良かったなというので、ええと、よろしかったら皆さんも、あのフルで見ると凄く長いんですけども、もしよろしかったら見てみていただけたらと思います。

山田―では、そろそろ終わりの時間近づいてきましたが、あとお一人かお二人に最後にお話をしていただきたいと思います。はい、お願いします。

参加者H―あの、つき子さんのお話を聞いていると、すごくなまっていらっしゃって、昼寝を「しるね」って言ったり、キツネの発音とかも聞いているだけで、そのう心がホッコリするなという感じがしてきました。おとといなんかすごく大雪が降ったので、升沢なんかはちょっと何十年か前は本当に冬なんかは特に厳しい生活だろうなという気がするんですけども、今日のお話と、その薬屋さんのお話で、キツネが手を叩いて笑ってたり、そのつき子さんが、「畑に^こ来ねえでね」とか「こんにちわ」って話しかけるシーンが、あのう景色が浮かぶようで、厳しい生活の中にもなんかこう豊かさとか愉快さを、近所の人なんかとおしゃべりしている様子が感じられて、すごく尊いなあというか素晴らしいところなんだなっていうのを感じました。

山田―ありがとうございます。今はない升沢地区なんですけども、そのように感じてもらえたら、つき子さんもうすごく喜んでいらっしゃるんじゃないかなあと思います。

ではそろそろ時間になりました。最後に、もしありましたら。はい。

島津【民話声の図書館】―私は、一応企画のここの部分【内部】の人間なんですけども…。先日、『遠野物語』を読んで、「この升沢って、つき子さんの話、『遠野物語』の世界そのままじゃない」ってすごく思ったんですね。すごく重なるところがあって、あの、そこをつき子さんは、つきさんとあともう一人、いとこの方って言うか姪っこさんでしたっけ、出てくるんですけど、やっぱりそういうのを感じて、直接キツネに話しかけたりとか、あとやっぱりそういう人の話をこうキャッチするっていうかね、そういう力があるから、つき子さんの今日の語りとか、このDVDになったんだなと思うんです。

さっきもちょっと言ったんですけども、私も升沢に初めて採訪に行ったときに、全然話らしい話が聞けなくて、ああ、なんていうところなんだろうってちょっとがっかりしながら半分帰ってきたんですけど…。いやあ、違うんだ。受け止める力があったり、感じる心があれば、もしかしてこの現実の今ここの場所にだって、そういう世界は作れるのかなっていう、そういう感じがするんですね。だから、なんか特別な世界として受け止めるんじゃなくて、何かそういう気持ちを持っていきたいって、自分がそういうようことをつき子さんのDVDを見せてもらったり、お話を聞かせてもらったりして自分で思ったので、是非ほんとは皆さんにも、どんなふうに考えてらっしゃるかなって、お話聞きたいなって思ったんですけどなかなか時間が取れなかったの……私はそんなことを感じました。ありがとうございます。

山田―本当は皆さんにもっとお聞きしたいところですが、ちょうど時間になってしまいました。今日は二時間って長い時間でしたけれども、最後まで参加いただきましてありがとうございます。つき子さんも亡くなられて三年か四年でしたか？

小田嶋一亡くなられたのは二〇一九年です。

山田一 つき子さんは、大勢の前でとか、人前で語ることは、なさらない方だったんですが、でもきっと喜んでくれるんじゃないかなと思います。今日はどうもありがとうございました。

それではですね、先ほどからあのお話が出ています、小野和子さんがですね、本を今度出しましたので…

島津一 先ほどあのチラシをお配りしましたが、本当は今日、小野さんもおいでになる予定だったんですけど、ちょっと体調を崩されたので無理をなさらないでくださいということでお休みいただきましたが、『あいたくて ききたくて 旅にでる』っていう小野さんの民話探訪者としての集大成の本が前に出たんです。これが二冊目になります。これは、『忘れられない日本人』という題で、民話の語り手の方々八名のことを、小野さんとの出会い、そして語りの様子などを詳しく書かれたものです。ぜひとも皆さんに読んでいただいて、今日のつき子さんはここには出てこないんですけども、いろんな語り手との出会いで、小野さんが考えられたこと、私たちが学びたいことが盛りだくさんに書かれていると思います。ぜひとも皆さんに読んでいただきたいし、日本中の皆さんに広めていきたい本ですので、どうぞよろしく願いいたします。今日は先行販売ということで、まだ本格的な本はできてないのですが、とりあえず今日のために、本を間に合わせて作っていただいたものなので、よろしかったらお求めください。

山田一 はい。では、これで「小さなゆうわ座」を終わります。今日は最後までありがとうございました。どうぞ気をつけてお帰りください。

—以上—

〈凡例〉

*録音記録の文字起こしをそのままテキストとし、章節を分け、見出し、話者名などを付加した。

* [] 内はテキストの訂正や文脈上の補助、() 内はテキスト内の語の注記を記した。